

## &lt;第57回例会&gt;

## ポーランド文学作品朗読会 &amp; 懇親会

&lt;予約不要&gt;・直接会場へお越しください。



山桜今年も咲いてくれました。

○月○日。

たとえば、午後のポエジアを

あるいは、午後のエッセイを

戒厳令下のポーランド

ヤルゼルスキは何が好き

チャスコ、ヘルバァターおひとつ、如何です。

栗原朋友子は何読むの

絵本くわしい斎田 道子

小樽から長屋のり子は自作の詩朗読

安藤むつみ。小林 暁子。氏間多伊子。

ポーランド人の

ポーランド語響(ひびく)午後の教室。

itd・・・

在札幌のポーランド留学生ら多数出演。

遊びせんとや、生まれけむ。

アラ、よっ〜と〜。

## --第I部--

<作品> ◆ブラウンさんのネコ [スラウオミール・ウォルスキ(ヨゼフ・ウィルコン/絵)] ◆タトラのねむれる騎士-ポーランドの伝説による-[アグニシカ・ウメダ再話(越智典子 訳)] ◆「灯台守」から[ヘンリク・シェンキエヴィチ(吉上昭三 訳)] ◆もの食う人びと [ヤルゼルスキ(辺見庸 訳)] ◆「寓話集」より[イグナツィ・クラシツキ(沼野充義 訳)] 他

<朗読> 斎田 道子/安藤むつみ/小林 暁子/  
霜田千代麿/栗原朋友子/氏間多伊子/長屋のり子

## --第II部--

<作品> 只今選定中 <朗読> 在札ポーランド人

## --懇親会--

ポーランドの文学に触れたあと、楽しい交流もあります。

## &lt;第58回例会&gt;

第3回 ポ文協 修学旅行  
～池田町ワイン祭り～

2011.10/1-2 (土-日)



第一回の修学旅行は16年前。有志10人と現地会員とで、雄大な十勝の秋を満喫しました。とても楽しかったのでその翌年も企画し、牛の丸焼き、ワイン飲み放題に加え、まじめな学習、パークゴルフなど、ポ文協ならではの、楽しくも奥深い修学旅行になりました。

諸般の事情で中休みがありましたが、久しぶりにまた、ワイン祭りを楽しみたいと思います。「学生」の心に戻ってワインで乾杯しませんか。

小林暁子(こばやし・あきこ)

- **会費** : 15,000 円位(バス・宿泊費・ワイン祭り参加費含む。他に食事代がかかります)

- **参加人数・お申込み方法** : 6 月末まで(先着25名まで。すでに10名の申し込みがあります)

- ① 氏名 ②参加人数 ③連絡先を下記までお知らせください。

【事務局】 電話・FAX: 011-790-8610

携帯☎: 090 6447 1700 (佐光)

## ● 旅程と内容

10/1 (1 日目)	札幌発 <u>10:00</u>	帯広 14:30	池田着 15:05	<u>16:05</u>
	池田町見学・会員との交流・勉強会、前夜祭(町民屋台)他			
10/2 (2 日目)	池田発 <u>15:56</u>	帯広 16:56	札幌着 18:00	<u>22:05</u>
	パークゴルフ(清見が丘公園)、ワイン祭り			

帯広・池田間はバス→JR への変更の可能性あり。



第37回を迎える「秋のワイン祭り」は、ブドウの収穫とワインの仕込みを祝い、毎年10月第1日曜日に開催しています。



数年前に江別の「ドラマシアターども」で行った「寺山修司作品とポーランド文学」以来2度目の朗読会。文学離れが著しい、まして本は目で読むものであり、声に出したり、耳で聴いて感じるものという考えが浸透していない、現在の日本でこのような催しするのは、非常に冒険的であった。しかし、結果的には大成功でありしばらく体験したことのないような、創造的で濃密な時間を過ごすことができた。

前半は、日本人によるポーランド文学の朗読、後半はポーランド人によるポーランド語での朗読と音楽という2部構成にした。まず第1部は、お二方による絵本の読み聞かせから始まった。絵本の絵をどう見てもらうかが問題であるが、今回はプロジェクターを使い、スクリーンに大きく映し出した。「ブラウンさんのネコ」、「タトラのねむれる騎士」どちらもポーランドの児童文学の豊かな伝統を感じさせる素晴らしい作品であった。

また、長屋のり子さん＝写真B＝はシンボルスカの作品に加え、自作の短歌を披露してくださった。これは日本の定型詩の伝統をポーランド人に紹介したいとの希望からである。ヤセンスキの小説「無関心な人々の共謀」の冒頭に揚げられたロベルト・エベルハルトのことばがとりわけ心に残った。

「敵を恐れるな——かれは君を殺すのが関の山だ。友を恐れるな——かれらは君を裏切るのが関の山だ。無関心な人々を恐れよ——かれらは殺しも裏切りもしない。だがかれらの沈黙の同意があればこそ、地上に裏切りと殺戮が存在するのだ」

第2部は、北大の留学生であり、ジャズボーカリストとしても活躍されているヨアンナ・クンツェヴィッチさん＝12頁参照＝による歌、「ローズマリーの子守唄」から始まった。キーボードの伴奏は、クラコフの



教会のオルガン奏者であり、現在は北大の客員研究員の札幌在住中のピョートル パヴラクさん。

ジャズのアーティストと、宗教音楽専門の音楽家とのコラボレーションは、素晴らしい化学反応を起こし、会場にいるすべての人が内省的なポーランドジャズの響きに酔った。

続くダニエル・ガエフスキさん＝写真E＝は、ヨーロッパの地

図からポーランドが消えていた時代にヨーロッパ諸国を回り、ポーランドの文化の素晴らしさを説いたという聖ウルシュラの生涯を紹介し、彼女の手紙の一節を朗読。筆者の中で、なぜかキューリー夫人とマリア・テレサがひとつに重なりあった。

「ひとが祖国を愛するのは、祖国が自由で誇り高い、富に溢れた国だから。しかしポーランドよ、私たちがお前を愛するのは、お前が抑圧され、虐げられているから」

最後の2組は、会場を非常に暖かい、ユーモラスな空気に包んでくれた。まずウカシュ・ザブウォニススキさんのギターと、娘さんのミカエラちゃん＝写真F＝の鉄琴の共演により、ポーランドの歌を披露してくれた。それまでの芸術的に研ぎ澄まされた空気が和み、ステージと観客の距離が一気に縮まる。最後は、ヨアンナさんとピョートルさんのペアに、マルタ・ジェムツカさん＝写真G＝が加わり「二日酔いブルース」を披露。これは在札幌ポーランド人のトマシュ・スタシンスキさん（時々、本誌「POLE」に映画論を執筆）のオリジナル作品である。ポーランド語の歌詞の合間に「アタマ・ガ・イタイ」、「ヨッパラウ」などの日本語のセリフを織り込んだ遊び心に溢れたユーモラスな作品に会場全体が笑いに包まれた。

今回は、スタッフ、出演者一同、朗読会の持つ可能性の大きさと奥深さを思い知らされた。また近いうちに、第2弾、第3弾を催したいと思いますので、その際には、ぜひ会員の皆様の参加をお待ちしています。（佐光事務局長）



興味深いポーランド語の映画のポスターを配置（霜田千代磨さん所蔵）

会場にはポーランド文化や文学を理解するための工夫がなされた



聖ウルシュラを紹介する写真や資料を展示（ダニエルさん所蔵）



A



B



C

<第I部> 日本語の音読

- ◆「ブラウンさんのネコ」  
スラヴォミール・ウォルスキ(ヨゼフ・ウィルコン絵) <斎田道子>
- ◆「外ラのねむれる騎士—ポーランドの伝説による—」  
アグニシカ・ウメダ再話(越智典子 文) <安藤むつみ>
- ◆「灯台守」から  
ヘンリク・シェンキェヴィチ(吉上昭三 訳) <小林 暁子>
- ◆「もの食う人びと」  
ヤルゼルスキ将軍(辺見庸 インタビュー) <霜田千代麿>
- ◆「寓話集」から  
イグナツィ・クラシツキ(沼野充義 訳) <佐光伸一>
- ◆「昼の家、夜の家」から  
オルガ・トカルチュク(小椋彩 訳) <氏間多伊子>
- ◆「シンボルスカの詩」 自作詩 <長屋のり子>



D



E

<第II部> ポーランド語による朗読と音楽

- ♪ 「Kołysanka Rosemary」 W. Młynarski/K. Komeda  
「ローズマリーの子守唄」W.ムウナルスキ/K.コメダ  
<ヨアンナ・クンツェヴィッチ (Joanna Kuncewicz)> =写真 D=
  - ◆ 「Jeszcze Polska nie zginęła dopóki kochamy」  
Urszula Ledóchowska  
「愛する限りポーランドは未だ滅びず」 聖ウルスラ  
<ダニエル・ガイェフスキ (Daniel Gajewski)> =写真 E=
  - ♪ 「Celina」Tata Kazika 「ツェリナ」 タタ・カジカ
  - ◆ 「Wyznanie」「Historie ludzkie」 Czesław Miłosz  
「告白」「人間の歴史」 チェスワフ・ミウォシュ  
<ウカシュ・ザブウォニスキ(Lukasz Zabłoński)> =写真 F=
  - ♪ 「Kac Blues」 Tomasz Stasiński  
「二日酔いブルース」トマシュ・スタシンスキ  
<ヨアンナ・クンツェヴィッチ (Joanna Kuncewicz)  
マルタ・ジエムニツカ (Marta Ziemińska)> =写真 G=
- キーボード演奏 ピオトル パヴラック (Piotr Pawlak)



F



G

会場には霜田さん=写真 A=の書=写真 C=が飾られ、和の雰囲気をかもしだしていた。また、懇親会ではポーランドスूपのジュレックと数種類のケーキが振舞われた。